

## 48年の農業総産出額

## 6兆1,438億円

## 米の産出額は前年比174%増

農林省は去る7月23日、48年の農業総産出額概算を発表したが、これによると総額6兆1,438億円で、前年比21.0%（1兆0,644億円）の大巾な増加となった。伸び率が20%をこえたのは昭和30年以来初めてである。

ここには耕種部門の動向について解説する。

〔耕種部門〕48年の耕種部門の産出額は米、野菜、豆類、いも類などの産出額が大巾に上回ったため、21.5%（7,726億円）増と記録的な伸びとなった。

米：産出額2兆0,964億円。前年比17.4%増（構成比34.1%）

48年産米は政府買入価格が15.0%と大巾に引き上げられ、これが産出額増加の主因となった。また生産面においても、作付面積はほぼ前年並みであったが、全国的に生育初期から天候に恵まれ、作柄が良好（水稻作況指数106）で10a当り収量は470kgと、過去の最高であった前年の記録を更新し、収穫量が水陸稲合計で前年を25万トン（2.1%）上回る1,214万トンとなった。

麦類：産出額257億円。前年比23.7%減（構成比0.4%）

一貫して著しい減産を続けてきた麦類は、48年では価格がかなり（12.0%高）上昇したものの、産出額が前年比23.7%も著減し、わずかに257億円と40年当時の約4にすぎなくなった。

豆類：産出額743億円。前年比30.1%増（構成比1.2%）

48年の豆類の生産については、大豆が主産地の北海道で大巾に増反したのに加え、作柄も良好であったが、都府県で生産量が減退したことから、全国では前年並みとなった。あずき、いんげん豆は作柄が良かったがかなり減反し、落花生の作柄不良も影響して、豆類全体の生産量は前年比11.0%の減少となった。しかし価格面では、大豆をはじめとして一般に値上がりが大きく（豆類平均では48.6%高）このため産出額は前年比30.1%増加し、これまでの最高の伸び率となった。

いも類：産出額1,164億円。前年比52.4%増（構成比1.9%）

かんしょは作柄が良好であったものの、主産地の九州

をはじめ全国的な減反が影響し、生産量は前年を20.4%下回ったが、価格の著しい上昇（加工用43.2%高、食用120.7%高）に支えられて産出額は前年比34.0%増加した。

馬鈴しょは、主産地の北海道で作付が増え、作柄も良好であったが、都府県の減反が影響して、生産量は前年比4.1%の減少となった。しかし価格の高騰から産出額は63.9%増となった。

野菜：産出額1兆1,315億円。前年比37.5%増（構成比18.4%）

48年の野菜の著増は、価格の大巾な上昇に負うものであった。すなわち48年産の果菜類では、すいか、温室メロン、いちご、ピーマンなどの生産量は増加したが、きゅうり、なす、トマトなどの減産もあって、全体の生産量は前年をわずかに上回り、価格は19.1%高となった。

また葉茎菜類、根菜類では、きゃべつ、ほうれん草、ねぎ、大根、人参、さといもなど秋冬期露地野菜を中心に作付減や干ばつ等により減産し、一方、価格は大巾に上昇し、それぞれ92.8%高、64.1%高となり、産出額を著増させることになった。

果実：産出額4,676億円。前年比12.9%増（構成比7.6%）

前年はみかん価格の暴落により伸びの低かった果実の産出額は、48年はみかんの価格が持ち直し、前年比12.9%の増加となった。

48年産果実は、みかんが結果樹面積が微増と気象条件にも恵まれたものの、裏年にあつたため、生産量で339万トンと大豊作であった前年の5.0%減となったが、なつ柑、梨、桃などの作柄が良かったため、全体の生産量は2.2%増加した。

これに対して価格は、みかんが暴落した前年に比べ26.9%高となった反面、なつ柑、柿などの価格は下落したが、果実全体では9.5%の上昇となり産出額の増加に寄与した。

工芸作物：産出額2,879億円。前年比17.8%増（構成比4.7%）

工芸作物の生産量は、なたね、いなどの減産があったが、てんさい、茶、たばこなどの作柄が良くて、全体では前年より2.8%増加した。

これに加えて、価格面では茶が前年に比べ低めとなったほかは、こんにゃくいも、たばこ、いなどが堅調に推移し、工芸作物全体で13.2%高となったため、産出額は17.8%増加し、前年に続いて大きな伸びを記録した。